

# 『情史類略』の編纂者、成立年、評点について

## ―研究の現状とその課題―

高 珂峰

### はじめに

馮夢龍（一五七四年―一六四六年）は、蘇州の人。『喻世明言』『警世通言』『醒世恒言』（いわゆる「三言」）をはじめ、数多くの通俗文学の編纂に携わり、<sup>1)</sup>最盛期を迎えていた「明末出版文化の申し子」、<sup>2)</sup>「通俗文芸の旗手」とも称される人物で、当時の通俗文学を考える上での最重要人物のひとつと言つてよい。馮夢龍の出版活動を明らかにすることは、明末の出版文化の在り方を明らかにすることにもつながる。

馮夢龍に関する研究が盛んになったのは、塩谷温（一八七八年―一九六二年）が内閣文庫で「三言」の発見を報告（一九二四年）して以来とされている。<sup>3)</sup>人々「世紀回眸 馮夢龍研究の歴史和現状」『殷都学刊』、二〇〇一年第二期）によれば、

綜観二十世紀的馮夢龍研究、前五十年偏重作家作品考証、出現了一批像鄭振鐸、顧頡剛、趙景深、容肇祖、譚正璧等馮學大家、成果斐然、為馮夢龍研究奠定了堅實的基礎。後五十年在考証上基本沒有大的突破、但在作品文本的闡釋方面亦有可

喜的成績、並且有試圖從整体上把握馮夢龍的學術趨向。

（二十世紀の馮夢龍研究を全体的に見れば、前の五十年は作者作品の考証に重点がおかれ、鄭振鐸、顧頡剛、趙景深、容肇祖、譚正璧などの大家が現れて優れた成果を残し、研究の基礎を築いた。後の五十年は考証においては大きな突破を果たしていないが、作品の解釈においては喜ばしい成績を収め、しかも馮夢龍を全般的に把握しようと試みる傾向にある。）

と、二十世紀の馮夢龍研究をまとめている。二十一世紀の馮夢龍に関する総合的な研究としては、

- ・聶付生『馮夢龍研究』学林出版社、二〇〇二年
- ・龔篤清『馮夢龍新論』湖南人民出版社、二〇〇二年
- ・高洪鈞『馮夢龍集箋注』天津古籍出版社、二〇〇六年
- ・傅承洲『馮夢龍文学研究』中国社会科学出版社、二〇一三年
- ・大木康『馮夢龍と明末俗文学』汲古書院、二〇一八年

等が挙げられる。

これらの研究を見るに、馮夢龍の著作における研究は「三言」

に集中しているように思われる。一方「三言」は、実は彼の著作のひとつとされる『情史類略』（以下、『情史』とする）との関係が深いことも指摘されている。孫楷第「三言」兩拍源流考」（『滄州集』中華書局、二〇〇九年）には、

三書所演故事、往往見於『情史』『情史』署「江南詹詹外史評輯」、有馮夢龍序、世亦謂馮氏所作、其與通俗小說之關係頗可注意。  
（この三書〈三言のこと〉に収められる話は、しばしば『情史』に見える。『情史』は「江南詹詹外史評輯」と署名されており、馮夢龍の序を持ち、世間でも馮氏の作とされており、通俗小説との関係には注目に値する。）

と、「三言」の話がよく『情史』に見えることを指摘する。更に韓南「早期的中国短編小説」（韓南著、王秋桂等訳『韓南中国小説論集』北京大学出版社、二〇〇八年）には、「三言」と『情史』の関係性について、

明末馮夢龍同時收編文言及白話小説成集、尤以「三言」及『情史』兩書為著。『情史』中的若干小説顯然又是仿「三言」的小説而成。（明末、馮夢龍は同時期に文言と白話の小説集を作ったが、特に「三言」と『情史』のふたつがその表れである。『情史』におけるいくつかの話もまた明らかに「三言」の小説の模倣をした産物である。）

と、『情史』には「三言」の小説を模倣した話があると指摘している。馮夢龍の研究において「三言」が重要であることには疑いがないが、「三言」に比べて研究の少ない『情史』についても、注目する必要があるだろう。

書名の通り、『情史』は「情」の歴史であり、「情」にまつわる古来の故事八百七十四話を収集して分類したものである。そもそも馮夢龍の出版活動を考える際に、欠かせないキーワードが「情」である。同じく馮夢龍の編纂による蘇州地方の民謡集『山歌』の序文には、「借男女之真情、發名教之偽藥（男女の真情を借りて、名教の偽藥たることを暴く）」と書かれており、馮夢龍が男女の「真情」に注目し、情によって偽りの封建礼教を暴く意図があったことが示されている。また、馮夢龍は友人である董斯張（一五八六年—一六二八年）編『広博物志』の刊行にも関わっているが、彼が担当した巻二十三「閨壺」は「賢母、賢婦、節婦、才婦、孝女」という内容であり、大木康氏は『明末江南の出版文化』（研文出版、二〇〇四年）において、まさしく「男女の間柄に対する関心を終始失わなかった馮夢龍にふさわしい巻であったといえよう」と指摘している。馮夢龍が数々の書物の編纂において、「情」に対して、とりわけ男女の情に強い関心を持っていたことがわかる。『情史』は、まさに馮夢龍が既存の作品の中から男女の愛情を中心とした「情」の故事を集めたものである。

『情史』の版本について、BARBARA BISETTO氏は「The Composition of Qing shi (The History of Love) in Late Ming Book Culture（晩明書籍文化における『情史』の構成）」（Peter Lang

二〇一二年)において、

As already mentioned, the work was published during the late Ming, as demonstrated by the Zengyantang edition held in the Shanghai Library. During the Qing dynasty, it was printed – probably at the beginning of the eighteenth century – by the famous printing shop Jieziyuan 芥子園 in an edition in 24ce (fascicles), and later it was repeatedly reprinted on the basis of this edition. Several Qing editions of Qing shi state on the front cover page that the text is based on “woodblocks held by the Mustard Seed Garden” (Jieziyuan cangban 芥子園藏板). At my present stage of research, I have been able to find at least two editions based on the Jieziyuan woodblocks, one in 10ce and the other one in 14ce. Another Qing edition in 12ce was printed using woodblocks held by the publishing house Dongxiang 東溪堂.

(すでに述べたように、上海図書館に所蔵されている贈言堂版からもわかるように、出版時期は明末である。清代には、おそらく十八世紀の初めに、有名な印刷所である芥子園によって、二十四冊に印刷され、後にこの版を元に再版された。本文は「芥子園藏板」を元になっている。現在の調査段階では、芥子園の版木を基にした版本は少なくとも二つある。一つは十冊で、もう一つは十四冊である。十二冊のもう一つの清版は、東溪堂が所有する木版を用いて印刷された。)

との考察を行い、これほど多くの版本があることは、「これまでに伝えられてきた『情史』の刊本数と写本数は、清代から民国初期にかけての人氣を物語っている。さらに、テキストの形式の変化は、この作品とその時代」とのテーマの文化的意義を明らかにする助けとなる」と『情史』が大変な人氣を博したことを指摘した<sup>6)</sup>。

ところで、『情史』の構成について確認しておきたい。『情史』は二重分類法を用い、まず内容によつて、「情貞類」「情縁類」「情私類」などの二十四類に分ける。それをさらに細かく分類し、「夫婦節義」「貞婦」のような小分類とし、編纂時に収録されていなかった話は「補遺」の形で巻末に置く。二十四巻の内容について、簡単に整理すると以下ようになる。

- |     |       |                              |
|-----|-------|------------------------------|
| 巻一  | 「情貞類」 | 感情に一途な男女を描き、夫婦、妾、妓女などが節を守る話。 |
| 巻二  | 「情縁類」 | 天から賜った縁で、最後に円満に縁談を結ぶ話。       |
| 巻三  | 「情私類」 | 他人に知られずひそかに情を通ずる話。           |
| 巻四  | 「情俠類」 | 義理を重んじ、人を助ける話。               |
| 巻五  | 「情豪類」 | 女色に耽つて贅沢を尽くした王侯将相の話。         |
| 巻六  | 「情愛類」 | 男女それぞれに恋をする話や愛し合う話。          |
| 巻七  | 「情癡類」 | 愛情が深すぎて、常識外れなことをする話。         |
| 巻八  | 「情感類」 | 情によつて何か(鬼神等)を感動させる話。         |
| 巻九  | 「情幻類」 | 不思議なことで縁談が結ばれる話。             |
| 巻十  | 「情靈類」 | 不思議な力で情が人間の死生を左右する話。         |
| 巻十一 | 「情化類」 | 相手と一緒にいられるように人が何かに化け         |

る話。

卷十二 「情媒類」 何か（人、友人、生き物）を通して縁談を結ぶ話。

卷十三 「情憾類」 両思いの二人が縁が薄いために一緒にいられない（片方が早世してしまう等）話。

卷十四 「情仇類」 情はあるものの、心変わりなどの原因でうらみを抱くようになる話。

卷十五 「情芽類」 恋愛感情が賢人たちにも芽生える話。

卷十六 「情報類」 現世で現れる有情の報いと冥界で現れる無情の報いを集めた話。

卷十七 「情穢類」 情が行き過ぎて、淫乱になる話。

卷十八 「情累類」 情が害をもたらす話。

卷十九 「情疑類」 情に関する疑わしい話。

卷二十 「情鬼類」 人の死後、霊魂が形をなして現れ、人間と関わる話。

卷二十一 「情妖類」 動物や植物や器などが人間に化けて起きた話。

卷二十二 「情外類」 男性同士の愛情を集めた話。

卷二十三 「情通類」 万物が情を持っていることを証明できる話。

卷二十四 「情跡類」 情をもつて作られた詩詞と出来事を集めた話。

このように、『情史』には、人間から非人間に至るまで幅広く「情」に関する話を収めている。

『情史』には本文以外に、文後評、卷末評、眉批、傍批、夾批、圈点、傍点、と様々な評点が付されている。大木康氏は上海古籍

出版社の『馮夢龍全集』（一九九三年）に収められた作品を底本とし、経部、史部、子部、集部に分けて馮夢龍の著作の評点形式について調査、整理をした。<sup>3)</sup>『情史』が属する「子部」を見れば、『情史』には、題上の「○」、傍圈、傍点、傍空点、傍批、および回後の総評（本稿では卷末評とする）、各則の後評（本稿では文後評とする）、眉批と、評点の種類が他の作品に比べて、とりわけ充実していることがわかる。

しかし、『情史』には、まだ不明な点も残されている。筆者は『情史』の評点について考察を進める中で、いくつかの問題が生じた。最大の問題は筆名に関する疑問である。『情史』の文後評には、「子猶氏曰」「長卿氏曰」「弇州山人曰」等、様々な名が記されるが、そのうち「龍子猶」と「情史氏」はいずれも馮夢龍を指すとされている。しかしもしいずれも馮夢龍の評語だとするならば、なぜ筆名を使い分ける必要があったのか。あるいは『情史』の編纂者は馮夢龍とは別の人物なのか。そこで本稿では、『情史』の編纂者、成立年、評点に関する従来の研究を整理することで、その現状と課題についてまとめた。

## 一・『情史』の編纂者について

『情史』の編纂者について、実は馮夢龍だという明確な根拠はなく、馮夢龍の編纂ではないとする説もある。たとえば、寧稼雨編『中国古典小説総目』（山西教育出版社、二〇〇四年）では、

有署名龍子猶『情史序』和詹詹外史『序』。觀二序文字、馮夢龍未必即是詹詹外史。今人據此書與『智囊』『古今談概』内容多同而認為馮氏所作。存疑待考。

（情史には）龍子猶の署名を持つ「情史序」と詹詹外史と署名される「序」がある。二つの序文を見るに、馮夢龍は必ずしも詹詹外史であるとは限らない。現代の人はこの書物が『智囊』『古今談概』の内容と多く一致していることから馮氏の編としているが、再考する必要がある。）

と、『情史』がそもそも署名の異なる二つの序文を有することに疑問を呈した。

実際、馮夢龍の編纂による著作には、複数の筆名が用いられている。袁志「馮夢龍研究七十年」（『福建論壇・人文社会科学版』一九九三年第五期）に、

他曾以「龍子猶」「墨憨齋主人」「吳下詞奴」「前周柱史」「福曲散人」「香月居主人」「詹詹外史」「茂苑野史」「綠天館主人」「無礙居士」「可一居士」「可一主人」「墨浪主人」等筆名、整理、編纂、創作、出版了大量的話本小說、歷史小說、筆記小說、民歌、散曲、戲劇等作品、深受廣大市民喜愛、成為當時的暢銷書。

（馮夢龍は「龍子猶」「墨憨齋主人」「吳下詞奴」「前周柱史」「福曲散人」「香月居主人」「詹詹外史」「茂苑野史」「綠天館主人」

「無礙居士」「可一居士」「可一主人」「墨浪主人」などの筆名で、数多くの話本小説、歴史小説、筆記小説、民歌、散曲、戯曲を整理、編纂、創作、出版しており、それらの作品は市民たちから広く人気を博し、当時のベストセラーとなった。）

とあるように、実名である馮夢龍、字である猶龍や子猶、号である墨憨齋以外にも、十数種以上の筆名を使っていたとされる。これらの署名や筆名等については従来多くの研究がなされてきた。たとえば筆名を用いるのかというと、山口綾子「馮夢龍の号「墨憨齋」について」（『中国文学論集』第四十四号、二〇一五年）には、鈕琇『觚賸統編』卷二「英雄挙動」をあげて、

『掛枝兒』などの俗曲を世に出したことで自身の子弟の父兄から攻撃を受けるような事件が実際に起こったならば、馮夢龍にとつてそれは重大な出来事であり、世間では否定されるような通俗的な書物を編纂し刊行することを再考する契機ともなり得たであろう。……この出来事を経て『笑府』を刊行するに際し、徹底して「墨憨齋」を名乗った背景には、本稿で述べたように「憨」字の持つ概念を表明する意図があるほかに、当時彼が経験したある種の挫折感を振り切る意図が込められているのではないだろうか。

と、馮夢龍が実名でなく筆名を用いる動機の一つが他人の非難を免れるためであると指摘する。

なかでも「三言」の序に見られる署名は特に注目を集めてきた。『古今小説』『喻世明言』の序を記した「緑天館主人」については、以前より馮夢龍本人であるという説が有力であったが、楊曉東氏は「古今小説序作者考辨」(『文学遺産』一九九一年第二期)において、緑天館主人は馮夢龍ではないと明言し、その理由をいくつか挙げている。まず、その序文の内容から、序文の作者と小説の編纂者は同一人物ではないことが読み取れるとする。そして当時の江南にはすでに有名な「緑天館主人」なる文人(葉有声(一五八三年—一六六一年))がおり、その書齋である緑天館は清代の乾隆年間まで存在していた。さらにこの緑天館主人は馮夢龍と交遊があり、馮夢龍が友人の別号を自分のものにしてしまうことは考えがたいという。

この見解について、傳承洲「關於「古今小説叙」的作者問題」(『明清小説研究』一九九六第一期)は反論をし、緑天館主人は馮夢龍であるとしたが、廣澤裕介『短篇集『古今小説』と「三言」』(汲古書院、二〇二三年)では、

楊氏の論説は多くの史料に基づいており、その立証は揺るぎないと思われる……傳氏の主張は馮夢龍関連作品と『古今』収録作品の関係を述べて補強しているが、そもそも楊氏が根拠とした史料の記載を否定・批判出来ておらず、旧来の通説を繰り返して強調したに過ぎない。

と、楊氏の説、すなわち緑天館主人は当時の名士葉有声であり、馮夢龍ではないことを支持した。廣澤氏はさらに馮夢龍が署名を用いることについて、

馮氏は科挙の参考書や文言小説集『古今譚概』、『太平広記鈔』、『智囊補』では、「古吳(吳邑、吳門)馮夢龍」と本名で署名し、このほか「猶龍」「龍子猶」という字を使い、また『新列国志』『石点頭』や戯曲類では墨憨齋という齋号で自らの関与を示し、署名の使い分けをしている。

と指摘する。「署名の使い分け」は著作ごとに見られるのみならず、『情史』には「龍子猶」という署名を持つ序と文後評があるとともに、巻ごとに「情史氏」という署名のある巻末評がある。

さらに、これらの署名により、『情史』の編纂者問題が提起されてきた。容肇祖「明馮夢龍の生平及其著述」(『嶺南学報』一九三一年第二卷第二期)には、

肇祖案、『情史』與『智囊』及『譚槩』爲一類的書籍、而『情史』獨不自署姓名、且不署「龍子猶」的假名、只用「龍子猶」之名字序、稱作者爲「詹詹外史氏」、大約以中間有近于穢褻之點、恐來謗議、故遂如此。我初看龍子猶的序、及書中體例與『智囊』相近似、已疑爲馮夢龍作、及看『蘇州府志』藝文中所載、更覺證實。<sup>6)</sup>



（私が思うに、『情史』は『智囊』と『譚概』と同種の著作なのに、『情史』にだけ自分の名前を使わず、しかも仮名の「龍子猶」という署名もつけず、序を「龍子猶」の名で書いただけで、作者を「詹詹外史氏」とする。おそらくこの本には汚らわしいような内容があり、謗られることを恐れたために、こうしたのではないか。当初、龍子猶の序と体裁が『智囊』に近いことから、同じく馮夢龍の作なのではないかと考えていたが、『蘇州府志』芸文に「馮夢龍『情史』二十四卷」が記載されているのを見て、これが馮夢龍の作であるという確信を深めた。）

と、『情史』は馮夢龍の作であり、男女に関する赤裸々な内容について謗られることを恐れたために実名を使わなかったのだろうと指摘されている。この「恐來謗議（謗られることを恐れた）」という点については、陸樹命氏も『馮夢龍研究』（復旦大学出版社、一九八七年）に、

馮夢龍在序中說『情史』余志也。……而落魄奔走、硯田盡蕪、乃為詹詹外史氏所先、亦快事也。」編中凡涉及馮夢龍的地方、均用第三人稱。所有這些、均在說明此書是詹詹外史所輯。……馮夢龍為何不明言姓字、而假託詹詹外史。其原因在于有所顧忌。這種假託、馮夢龍是費用的。如所輯的『太霞新奏』、便署名顧曲散人和香月居主人、編中凡涉及馮夢龍的地方、亦皆用第三人稱。「三言」也是如此。

（馮夢龍は序文に「情史は私の志である。……しかし、私は落

ちぶれてあちこちを走り回り、編集する余裕がなく、詹詹外史氏に先手を取られたが、これもまた喜ばしいことである」と書いているように、馮夢龍について述べる際には作品中全て三人称が用いられている。この書物が詹詹外史の編によるものだと説明するためである。……なぜ馮夢龍ははつきりと自分の名前を出さずに詹詹外史と称するのか。その理由は（自身の名を明かすことに）差し障りがあるからである。こうしたやり方は、馮夢龍の作にはよく見られる。例えば、彼の編である『太霞新奏』は、顧曲散人と香月居主人と署名し、馮夢龍に言及するところにはやはり全て三人称が用いられている。「三言」もそうである。）

と、馮夢龍がはつきりと自分の名前を出さずに詹詹外史と称するのは自身の名を明かすことに差し障りがあるからであり、このやり方は彼が他の書物、たとえば「三言」を編纂する時にも見られると指摘している。

傳承洲『情史』輯評与情教思想」（『馮夢龍文学研究』、中国社会科学出版社、二〇一三年）は、『情史』の評輯者について、

『千頃堂書目』卷十二「小説類」著録「馮夢龍『智囊』二十卷、又『古今談概』三十四卷、又『情史』二十四卷。」『千頃堂書目』作者黃虞稷、字俞邵、泉州晉江人。生于明崇禎二年（一二九二）、卒于清康熙三十年（一二九二）。是清代著名藏書家。……其父黃居中（一五六二年—一六四四年）……喜藏書、

所居千頃齋藏書數万卷、並根据藏書著『千頃齋藏書目錄』六卷。……千頃堂所藏馮夢龍的著作、大體可以肯定為黃居中購藏。『千頃堂書目』共著錄馮夢龍著作四種、除前引小說三種外、卷二「春秋類」還著錄、「馮夢龍『春秋衡庫』三十卷、前後附錄二卷。」這四種著作、除『情史』外、其他幾種刊刻年代比較清楚、『春秋衡庫』刻於天啓五年、『智囊』刻於天啓六年、『古今譚概』刻於泰昌元年之前。而黃居中則與馮夢龍為同時代人、居中大馮夢龍十二歲、早馮夢龍兩年去世。當著名文人馮夢龍的著作行世時、酷愛藏書的黃居中一定會積極購藏。這恐怕是『千頃堂書目』著錄馮夢龍著作多種的原因。還有證明千頃堂所藏馮夢龍著作為黃居中購藏的旁證、在居中去世後、馮夢龍又編刻了『甲申紀事』『中興實錄』『中興偉略』等三種著作、千頃堂均未購藏。

『千頃堂書目』卷十二「小說類」に「馮夢龍『智囊』二十卷、『古今談概』三十四卷、『情史』二十四卷」と書かれている。『千頃堂書目』の作者は黃虞稷、字は俞邵、泉州晉江の人である。明崇禎二年（一六二九）に生まれ、清康熙三十年（一六九一）に亡くなった。清代の有名な藏書家である……その父は黃居中（一五六二年—一六四四年）であり……藏書を好み、住居としていた千頃齋には藏書が数万冊あり、藏書に基づいて『千頃齋藏書目錄』六卷を著した……千頃堂に所藏する馮夢龍の著作は、黃居中が購買して收藏した可能性が高い。『千頃堂書目』には馮夢龍の著作四種があり、前引の小説三種のほか、卷二「春秋類」には「馮夢龍『春秋衡庫』三十卷、前後附錄

二卷」とある。この四種の著作のうち、『情史』以外の刊行年ははっきりしており、『春秋衡庫』は天啓五年（一六二五）、『智囊』は天啓六年（一六二六）、『古今譚概』は泰昌元年（一六二〇）以前に刊行された。一方、黃居中は馮夢龍と同時代の人で、居中の方が十二歳上、馮夢龍より二年早く没した。著名な文人である馮夢龍の著作が世に出されるに当たって、藏書をこよなく愛好する黃居中はそれらを積極的に買収求めたに違いない。これが『千頃堂書目』が馮夢龍の著作を多く収録した理由であろう。また、千頃堂が所藏していた馮夢龍の著作が黃居中の購入したものである傍証として、居中の没後に出版された馮夢龍の『甲申紀事』『中興實錄』『中興偉略』の三種については、いずれも千頃堂に購入されていない。）

と考察を行い、馮夢龍と近い時代の人である黃居中が『情史』を馮夢龍の著書と見なしたことがわかる。さらに居中の没後に出版された馮夢龍の著作は千頃堂に購入されていなかったことから、千頃堂に所藏する馮夢龍の著作は黃居中が購買して收藏した可能性が高い、と指摘している。これに対して、尤麗雯「爭鳴出版業——晚明文人馮夢龍の個案研究」（国立中央大学博士論文、二〇一七年）は、

今日所見的『千頃堂書目』、内容闕誤甚多、甚至不乏重見之處、不僅是因為『千頃堂書目』所收甚廣、以黃虞稷一人之力難以完善、亦與此書經多人傳抄增補有關。



（今日見られる『千頃堂書目』が、内容に誤りが多く、重複するところも少なくないのは、『千頃堂書目』の収録範囲が広すぎて、黄虞稷一人の力では完成しきれなかったからだけでなく、この書物が多くの人に伝写され、増補されたことも関係している。）

とあるのを引き、『千頃堂書目』の間違いが多いことや、編纂に携わった者が黄氏父子だけではないことを示した上で、

僅以撰作時間無法確定為晚明的『千頃堂書目』做為『情史』作者是馮夢龍的強力證據、欠缺說服力。

（成立時期が明末かどうかも断定できない『千頃堂書目』だけで、『情史』の作者が馮夢龍であることを裏付ける強力な証拠とするのは、説得力に欠ける。）

と述べた。胡士瑩『話本小說概論』（商務印書館、二〇一一年、據中華書局一九八〇年版排印）には、

按照『情史』的龍子猶（馮夢龍別署）序云、「又嘗欲擇取古今情事之美者、名著小傳。……而落魄奔走、硯田盡蕪、乃為詹詹外史氏所先、亦快事也。」可證『情史』非馮夢龍所編。又『情史』卷十三「馮愛生」條有「龍子猶『萬生傳』」云云、卷二十二「萬生」條有「龍子猶『愛生傳』」云云、編者引用馮氏作品、亦可作為旁證。

（『情史』の龍子猶（馮夢龍の別名）序に、「また古から今に至るまでの男女の愛情に関する佳話を選び出して、それぞれの人物の伝を記した。……しかし、私は落ちぶれてあちこちを走り回って、編集する余裕がなく、詹詹外史氏に先手を取られたが、これもまた喜ばしいことである」とあることから、『情史』は馮夢龍が編纂していないことが証明できる。また、『情史』卷十三「馮愛生」の条に「龍子猶『萬生傳』」云々とあり、卷二十二「萬生」の条に「龍子猶『愛生傳』」云々とあり、編者が馮氏の作品を引用していることも、馮夢龍が作者でないことの傍証となる。）

とあり、『情史』の龍子猶序の内容、および『情史』が馮夢龍の他の作品を引用することから、『情史』の編纂者は馮夢龍でないとする。

一方、李華元 (Hua-yuan Li Mowry) 『『情史』における中国のラブストーリー (Chinese Love Stories from 『Ch. ing-shih』)』 (Archon Books、一九八三年) は、詹詹外史は馮夢龍の仮名であり、『情史』は馮夢龍の手になるものと主張し、その理由を五つ挙げている。

一、『情史』が馮夢龍のものであると記されている最古の文献は、馮夢龍の故郷である蘇州の地方志『蘇州府志』（一八六二年―七四年）である。地方志には、馮夢龍が二十四章からなる選集『情史』を編纂したと記されているだけである。馮夢龍の没後二百年を経て書かれたとはいえ、本書は蘇州の土地

と人々を記録資料に基づいて公式に記録したものであり、このことを真摯に受け止めなければならない。

二、『情史』は馮夢龍によって編まれた『智囊』および『譚概』の形式と似ており、テーマ別に配置されている。編纂者は個々の話に短評やコメントを頻繁に追加することによって読者に分類の意図を理解させ、『智囊』と『譚概』は各巻の冒頭に巻の要約が置かれているのに対し、『情史』は巻末に巻の要約が置かれている。また、『情史』の編纂者がテーマに沿って編纂した『情史』は、馮夢龍が編纂した『三言』を彷彿とさせる。

三、『情史』は話本と戯曲の関係が密接で、小説と戯曲についての編者の言及や注釈は、編者の両分野への精通と知識を示すだけでなく、彼自身がこの二つのジャンルのいずれかの作家であった可能性も示している。しかも『情史』には多くの呉の逸話も含まれており、編者の呉地の民間文学への編集能力も反映されている。

四、馮夢龍は「龍子猶」、「子猶」、「子猶氏」と呼ばれ、『情史』で最も名前が多く出てくる人物である。これらの署名がついた評語は『譚概』『智囊』との関連性かなり高く、さらに『情史』は龍子猶の作と署名している話を収めている。これらの話は、『情史』にしか見えず、『情史』のために書かれたものだと思う。

五、「馭亭女子」の話に収録された龍子猶が和する詩は「我修妬史書卿句、翻喜才名為妬垂」となっており、「妬史」は、まさに「馭亭女子」の所属する「情仇類」である。

以上を踏まえ、李氏は『情史』の編纂者は馮夢龍であると指摘した。

以上、『情史』の編纂者については諸説あるものの、地方志に編纂者を馮夢龍と明記していることや、馮夢龍の作と確定できる他の書物の評点と形式が一致していることから、現時点においては、馮夢龍が編纂者である可能性が高いと判断できるのではないかと思われる。

同時に山口氏や廣澤氏の論文に言及されている「署名の使い分け」という現象も間違いなく確認できる。序文に書かれた編纂者である詹詹外史氏が馮夢龍であるのかどうか、馮夢龍でないとすればどの人物なのかは更に考察する必要がある。

## 二・『情史』の成立年について

編纂者が明確でなく、その成立年についても不明である。序文に年号等が書かれておらず、直接的な証拠がないためである。

『情史』の成立年について、徐朔方「馮夢龍年譜」『晚明曲家年譜』所収、浙江古籍出版社、一九九三年）で『情史類略』之編集系長年累積而成『情史』の編集は長年かけて蓄積されたのである」と指摘されるように、『情史』が成立した具体的な時期は不明であるが、時期を考察する諸説について、以下、年代順にまとめた。

## 1、万暦年間（一五七三～一六二〇）成立説

王凌「馮夢龍生平簡編」（『福建論壇…人文社會科學版』一九九一年第三期）では、

公元一六二〇年（明万曆四十八年、時馮夢龍四十六歲）之前、馮夢龍的創作活動有……出版『情史類略』。有「龍子猶」序「詹詹外史」序、題「江南詹詹外史評輯」、看來都是馮夢龍的化名。『情史類略』中多次提到『譚概』評云、却從未提到『古今笑』。而『古今譚概』是在一六二〇年改為『古今笑』出版的、足證『情史類略』的出版時間在一六二〇年前。

（一六二〇年（明万曆四十八年、當時馮夢龍四十六歲）の前、馮夢龍の創作活動については……『情史類略』の出版が挙げられる。「龍子猶」序、「詹詹外史」序を持ち、「江南詹詹外史評輯」と題され、いずれも馮夢龍の仮名かと思われる。『情史類略』には何度も『譚概』評して云う」と言及されているが、『古今笑』の名は出てこない。『古今譚概』は一六二〇年に『古今笑』に名が改められて出版されたことから、『情史類略』の出版年が一六二〇年以前であることが証明できるだろう。）

と、『情史』の評語に引用される『古今譚概』という書名によって、『情史』の出版年を一六二〇（万曆四十八）年以前とした。しかし、高洪鈞『馮夢龍集箋注』（天津古籍出版社、二〇〇六年）では、

清人李漁作有「古今笑史序」云、「同一書也、始名『譚概』而問者寥寥。易名『古今笑』、而雅俗並嗜、購之者唯恨不早。」今人即據此認為、『古今譚概』刻成後、流傳不廣、故於庚申（一六二〇）春重刻、改名『古今笑』（見『古今譚概』影印說明）。清修『四庫全書總目』卷一三二「子部・雜家類存目」九也著錄有『譚概』三十六卷、內府藏本、明馮夢龍撰。是編分類匯輯古事、以供談資、然體近俳諧、無關大雅。」這就是說、至明末清初、社會上流傳的、藏書家見到的和國家書目著錄的、是『古今譚概』而非『古今笑』。『古今笑』出版在前、時人已少見、或說已為『古今譚概』所替代。『古今譚概』是『古今笑』的改版易名、重刻在後、並非「問者寥寥」。

（清人李漁は「古今笑史序」を書き、その中で「『古今譚概』と『古今笑』は」同じ書物である。始めに『譚概』と名を称したが、（この本について）尋ねる人は少なかった。名を『古今笑』と改めたところ、高雅な人も俗悪な人もこの本を好み、買う者はひたすら早くこの本を手に入れたがった」という。ここから現代の人々には、『古今譚概』は刻された後、広く知られず、庚申（一六二〇）春に改めて刻され、名を『古今笑』と改めた」と認識されている『古今譚概』の影印説明を参照）。清修『四庫全書總目』卷一三二「子部・雜家類存目」九にも、『譚概』三十六卷、內府藏本、明馮夢龍撰。この書物は古い話を分類して収集し、話のネタを提供するものであるが、内容は滑稽譚に近く、高雅な書物ではない」とある。つまり明末清初まで、世間に流布し、藏書家が目にしたものや國家の書目に著録さ

れたものは、『古今譚概』という書名であつて『古今笑』ではなかったのである。『古今笑』の出版は『古今譚概』より先で、当時の人にもすでに珍しい書物となり、あるいは『古今譚概』に取って代わられたと言われる。『古今譚概』は『古今笑』を改版したもので、「（この本について）尋ねる人は少なかった」（ではない。）

と、『古今譚概』という書名は李漁が云うように一六二〇年に『古今笑』に改められたのではなく、『古今笑』の出版が『古今譚概』より先であることから、『情史』において、『古今笑』ではなく『古今譚概』という書名を用いることで『情史』の成立年を推測する王凌氏の方法に否定な意見を示した。

## 2、天啓～崇禎年間（一六二〇～一六四四）成立説

柳正一『『情史』の 評 輯 者 及 成 書 年 代 考 證』（『情史』の 評 輯 者 及 び 成 書 年 代 考 証）（『中國小説論叢』第四十五輯、二〇一五年）は、

現存する文献資料によって明らかにした状況から、『情史』は「三言」以前に出版されたものと見るのが妥当で、その時期はおおよそ一六二三（天啓三年）二月から一六二四（天啓四年）の間に出版されたものと推定され、正確な文献での刊行が可能な成書年代は一六二三年二月から一六三二（崇禎五年）年正月十日の間である。

と指摘した。『情史』が引用している『情種』の中で、年代が最も遅い作品である巻二の「鳳凰集大塊山」を根拠として、成書上限を一六二三年二月以降とし、貢修齡（一五七四年～一六四一年）『斗酒堂集』巻六に載せられている「讀情史」という詩を根拠に、成書の下限を一六三二年正月十日以前としたのである。

前述のように、『情史』は「三言」と関連性が強い。大塚秀高『警世通言』版本新考』（『日本アジア研究』第九号、二〇一二年）によれば、佐伯文庫本『警世通言』巻二十三に「可入情史（情史に入るべし）」という眉批が存在しているという。『情史』巻一「情貞類」にはまさしくこの話が収められている。『警世通言』は天啓甲子臘月（一六二四年旧曆十二月）に書かれた「無礙居士」の序を持ち、編纂者は馮夢龍であるとされている。<sup>9)</sup>

『情史』の編纂者が馮夢龍であるとすれば、『情史』の出版はこの眉批を持つ『警世通言』より遅いことが想定できよう。つまり、ここからは『情史』の出版を一六二四年旧曆十二月以降に絞ることができるとができる。

## 3、崇禎年間（一六二八～一六四四）成立説

傅承洲『『情史』 輯 評 者 考 辨』（『中央民族大学学报』二〇〇一年第三期）では、

『情史』的輯評時間応在崇禎初年。馮夢龍於崇禎三年出貢、隨後任丹徒縣訓導、崇禎七年升任壽寧知縣。崇禎三年之後、馮

夢龍似無暇評輯小説、『情史』成書當在崇禎元年至三年之間。

『情史』の輯評時期は崇禎の初めであるはずである。馮夢龍は崇禎三年に貢生に拔擢されて、その後丹徒県の訓導に任ぜられ、崇禎七年に壽寧知県に昇進した。崇禎三年以降、馮夢龍は小説を評論する暇がなくなったように思われることから、『情史』が成立したのは崇禎元年から三年の間であろう。）

と、『情史』の成立を崇禎元年から三年の間とする。これは馮夢龍の経歴から成立年を推測する方法である。

また、『情史』が引用した書物から成立年を分析する方法を用いたのが高洪鈞『馮夢龍集箋注』（天津古籍出版社、二〇〇六年）である。

『情史類略』中有許多素材、曾被編為白話小説。……這些「小説」、都見載于馮夢龍另編之『醒世恒言』中、胡士瑩著『話本小說概論』也作如是說。而作為「三言」之三的『醒世恒言』、序刊于天啓七年（一六二七）中秋、這是明熹宗在位的最後一年。『情史類略』中既已引述此事、說明它成書是在『醒世恒言』後、亦即崇禎朝了。但書中並未言及崇禎朝的「情」事、說明它大體編就在崇禎初年。又由于書中各卷末都有「補遺」若干、說明它在鐫刻過程中隨時補充進了新材料。所以我認為、『情史類略』最終成書是在崇禎二年（一六二九）。

『情史』には多くの素材があり、白話小説にもされている……これらの「小説」は、馮夢龍が編纂した『醒世恒言』に

も見られ、胡士瑩著『話本小說概論』にもこのことが指摘されている。「三言」の中で最後に出版された『醒世恒言』の序によれば、本書は天啓七年（一六二七）中秋に刊行されているが、これは明の熹宗在位の最後の年である。『情史』には既に「小説」の話が引用されており、成立は『醒世恒言』の後、つまり崇禎期である。しかし、崇禎期の「情」についての話は収録されておらず、崇禎初年にはほぼ成立していたことが分かる。また各卷末に「補遺」があるのは、刻書の過程で随時新しい材料を補っていたことを示している。これらのことから、『情史』が最終的に成立したのは崇禎二年（一六二九）だと考えられる。）

と、『情史』に見える「小説」の話が全て馮夢龍の編とされる『醒世恒言』に見えると主張し、

崇禎元年戊辰（一六二八年）、馮夢龍五十五歳、『情史類略』大體編就、但隨刻隨有「補遺」。崇禎二年己巳（一六二九年）、馮夢龍五十六歳、『情史類略』最終編定。

（崇禎元年戊辰（一六二八年）、馮夢龍五十五歳であり、『情史』をほぼ編纂し終わったが、刊刻と同時に「補遺」を加えている。崇禎二年己巳（一六二九年）、馮夢龍五十六歳のときに、『情史』は最終的に完成した。）

と結論づけた。しかし、袁行雲氏「馮夢龍「三言」新証——記明刊「小

説」(五種) 残本」(『社会科学戦線』一九八〇年第一期) によれば、『情史』が「小説」に言及したのは、併せて六箇所あるという。高氏が挙げた『醒世恒言』の三例以外に、同じく『醒世恒言』に一例見えるが、他に『古今小説』に一例、『警世通言』に一例があるため、「小説」は『醒世恒言』ではない。ゆえに『醒世恒言』の出版年から『情史』の成立年を推測する方法はまだ検討の余地がある。一方、金源熙『情史』故事源流考述(鳳凰出版社、二〇一一年)は、『情史』が引用した書物のみならず、『情史』を引用した書物から成立年を分析する方法を用いている。

筆者認為確定『情史』成書の關鍵時間是天啓六年。……『情史』卷五「情豪類」「補遺」中收入「王寶奴」故事。……『情史』評語直接引用潘之恒的話、可見『情史』利用的是『亘史』中記載的『王眉山傳』、『亘史』雖然由潘之恒編寫、但最後是由其子潘弼亮遵其遺願於天啓六年(一六二六)重新刊刻。此外『情史』還引用了天啓年間出版的『情種』、此書大約出版於天啓三年之後。由此看來、『情史』很難成書於天啓六年之前。此外、馮夢龍於天啓六年『智囊』之外、尚輯有『太平廣記鈔』一書。從『情史』與『太平廣記鈔』之間的密切關係上、<sup>1)</sup>可以推測馮夢龍在此書編竣之後不久即着手評輯『情史』。引用『情史』之書、有明徐應秋『玉芝堂談薈』。……據『衢州縣志』、此書累歲而成。書中記載有崇禎年間的事、其中最晚的是卷二十一「雨雹作男女鳥獸形」中的崇禎十年(一六三七)。筆者認為『玉芝堂談薈』崇禎十年之後不久刊刻的。總之、『情史』成書上限大

約為崇禎元年、下限為崇禎十年左右。因此『情史』的明刻本也大約出現崇禎年間、而不是萬曆或者天啓年間。

『情史』の成立年を確定する際に鍵となるのは天啓六年であると考え。……『情史』卷五「情豪類」「補遺」に「王寶奴」の話が収められている。……『情史』の評語は潘之恒(一五三六年—一六二二年)の言葉を直接に引用したものであることから、『情史』が『亘史』に記載されている『王眉山伝』を利用してことがわかる。『亘史』は潘之恒が編纂したが、最後にその子である潘弼亮がその遺志に従って天啓六年(一六二六)に再刊行した。また『情史』は天啓年間に出版された『情種』も引用しているが、この本は天啓三年以降に出版されたものである。このことから見ると、『情史』が天啓六年以前に成立した可能性は低い。また、馮夢龍は天啓六年の『智囊』のほか、『太平廣記鈔』も編集している。『情史』と『太平廣記鈔』との密接な関係から、馮夢龍はこの本の編纂が終わった直後に『情史』の編集に着手したと推測される。『情史』を引用した書物としては、明の徐應秋『玉芝堂談薈』がある。……『衢州縣志』によると、この本は長年にわたって作成されたとされる。崇禎年間のことと記されており、最も遅いのは卷二十一「雨雹作男女鳥獸形」の崇禎十年(一六三七)である。筆者はこの『玉芝堂談薈』が崇禎十年の後に刊行されたと考えている。つまり、『情史』成立の上限はだいたい崇禎元年、下限は崇禎十年ぐらいである。そのため『情史』の明刻本も崇禎年間に出版されたもので、万暦や天啓年間ではない。)。



金氏は、『情史』の編纂は『太平広記鈔』の直後であると推測し、『情史』を引用した書物の刊行年が崇禎十年であることから、『情史』の成立を崇禎元年から崇禎十年であるとした。

以上の諸説を踏まえれば、『情史』の成立は、万暦年間ではなく、天啓六（一六二六）年以降から崇禎十年（一六三七）と考えるのが妥当ではないだろうか。

### 三・『情史』の評点について

『情史』の編纂者や成立年への考察において、欠かせない要素の一つが評点である。

程国賦「論明代坊刊小説的広告手段」（『學術研究』、二〇〇七年第六期）では、明代出版業界のいくつかの宣伝手段が紹介された。明代の書坊は大量の小説を刊行し、その数は翻刻本を含め、四百四種にのぼる。書坊の主人たちは様々な工夫をすること、出版物の影響力を高め、売り上げを伸ばそうとする。出版物の題目には新刊、新刻、……評点、評林、題評、批評、評定、圈点、増評等が常用されている。書名に用いられるこれらの用語は小説の編集に関わる用語であり、編集者の身分、注釈（音注、人名地名注）章節の増減、校勘、挿絵、評点等の情報が一目瞭然であるという。評点の有無等の状況が書名に表れるものが多いことから、評点が出版における重要な要素であることが窺える。

『情史』の評点が豊富であることはすでにはじめにで紹介した。まず巻末評を見ていきたい。巻末評はすべての巻の最後に付けられており、「情史氏曰」から始まる。その役割について、『情史』の序文の最後には、

雖事專男女、未盡雅馴、而曲終之奏、要歸於正。

（『情史』は）もっぱら男女のことを述べているが、字句がすべて正しく穏当とはいえないため、世俗の音楽を演奏し終えたら、正しい樂章を歌うように、最後には正しい道に戻らなければならぬ。）

とあるが、ここで「要歸於正（最後には正しい道に戻らなければならない）」という役割を果たしているのが、巻末に置かれた評語つまり巻末評のことである。巻末評の署名について、何悦玲氏は『馮夢龍『情史』評輯的「情美学」創建及其價值意義』（『人文雜誌』二〇〇九年第五期）で、

『情史』評輯中、馮夢龍在篇末或卷末仿照「太史公曰」的筆法、以「情史氏曰」、「情主人曰」等形式加以評論。之所以如此、就是企圖通過這樣的體式、把被理學思潮視為惡、視為不善的「情」、納入「史」的範疇、從而提高「情」的史學地位和意義。『情史』の編集において、馮夢龍は文末あるいは巻末に「太史公曰」のような書き方を見習って、「情史氏曰」、「情主人曰」などの形で評語を付す。こうすることで、理學思想で悪や不

善と見なされてきた「情」を「史」の範疇に入れ、「情」の史学的地位や価値を高めようとしたのである。）

と、「情史氏曰」は『史記』の「太史公曰」を模倣した形式であり、『史記』を模倣することによって、たんなる「情」の話を歴史の一部に昇格させようとしたことを指摘した。同様の形式は明代においては、楊慎『滇載記』に「逸史氏」、宋懋澄『九籥集』に「外史氏」、王燁『嗜史』に「嗜史氏」などが用いられており、評語の一つのパターンだったことが窺える。

上述したように、卷末評はその巻のまとめとしての役割を担っている。趙東梅氏は「馮夢龍『情史』の分類及得失」(『中国学論叢』第十七卷十七号、二〇〇四年)において、

在卷末評中、有情史氏評曰……「情妖類」是編撰者工作作得最不細致的一類。輯錄標準與「情鬼類」作品相比、顯得較為混亂。「情鬼類」無論所叙為何種鬼怪、皆從「情」字立意、而「情妖類」非如此。作品呈現出較為蕪雜的面貌、作者所作的評論也甚少、且大多為內容方面的考較、從「情」字上立論的評論少而又少、看來、編者自身在編輯時、所持標準也不是很清晰的。(卷末評は、「情史氏評曰」から始まる。……「情妖類」は編纂者の作業が最も手薄な部である。収録基準は「情鬼類」に比べて混乱しているように思われる。「情鬼類」はどのような鬼怪を述べようが、皆「情」を出発点としているが、「情妖類」はそうではない。作品は比較的雑な様相を呈し、作者の評

語もかなり少なく、しかも内容面での考察が多く、「情」の文字から論を立てる評語は非常に少ない。どうやら、編者自身が編集する際の標準もはっきりしていないようである。）

と、卷末評から遡ることで、所収作品の分類基準に揺れがあることを指摘した。

文後評については、柳正一「馮夢龍の『情史』에 드러난 評語의 존재 양상과 情敎思想」(『中國小説論叢』第五十五輯、二〇一八年)において、文後評を記名、無記名のものに分け、記名のあるものに基づいて論を展開し、無記名の評語についても編纂者自身によるものと、他者の評語を引用する際にもとから本文に付いていたものがある」と指摘した上で、<sup>1)</sup>

この結果をもとに見ると、少なくとも馮夢龍の評語を含め、『情史』内に存在する、記名されたすべての評者たちはみな明代の人々であるという点を発見することができる。『情史』は、先秦時代から明末までに存在する様々な文献をもとに集録されたが、その評語は馮夢龍自身や明人たちの哲学と価値観が全面的に反映されていることがわかる。もう一つの意味のある事実、呉震元の『奇女子伝』が『情史』の評語に最も大きな影響を与えたという事実である。

と指摘し、

卷一情貞類 四十八篇中三十一評語十卷末評

1 〈隨清娛〉 長卿氏 見『奇女子傳』卷之一□隨清娛□

2 〈綠珠〉 南陽生（原作者 評語）

3 〈張小三〉 外史氏

4 〈高娃〉 長卿氏 見『奇女子傳』卷之四

5 〈楊娼〉 房千里（原作者 評語）

6 〈張美人〉 錢簡棲

7 〈皇甫規妻〉 長卿 見『奇女子傳』卷之一

のように、記名のある文後評について巻ごとに考察を行った。柳氏は所収作品の数、『情史』につけられた文後評の数と記名を表にまとめた後、『情史』に反映された「情教思想」に注目した。こうした視点は、馮保善「馮夢龍の有情社会理想——情史思想理路及意義発微」（『明清小説研究』二〇二三年第三期）にも共通しており、『情史』の序文、文後評、巻末総評から、馮夢龍の「情」観及び『情史』の編纂意義を見る論述となっている。同様の観点は、評語を検討する典型的なパターンであり、数多く存在しているため、ここでは取り上げない。

おわりに

以上、『情史』の研究史を、一・編纂者について、二・成立年に

ついて、三・評点について、に分けて整理した。

編纂者について、地方志に編纂者を馮夢龍と明記していることや、『情史』に見られる評点が馮夢龍の作と確定できる他の書物の評点の形式と一致していることから、現時点では馮夢龍が編纂者である可能性が高いものと見てよいのではないかと思われる。同時に先行研究で言及されている「署名の使い分け」という現象も間違いなく確認できる。序文に書かれた編纂者である詹詹外史氏が馮夢龍であるのかどうか、馮夢龍でないとすればどの人物なのかは更に考察する必要がある。

成立年について、『情史』が利用している『亘史』が天啓六年（一六二六）に再刊行された書物で、『情史』を引用した書物の刊行が崇禎十年（一六三七）であることから、『情史』の成立年を天啓六年（一六二六）から崇禎十年（一六三七）頃だと考えるのが現時点では妥当であろう。さらに先行研究からは、『情史』に収められた作品の成立年から『情史』の成立年の下限を考察する方法が用いられていることから、今後さらに『情史』の成立年を絞れる可能性がある。

評点について、筆名や署名の問題はさらに考察する必要がある。例えば、巻四「情俠類」には「龍子猶」の名が四回挙げられ、それぞれ「龍子猶有『張潤傳』」、「子猶曰」、「子猶云」、「子猶氏曰」となっている。一つ目は龍子猶に「張潤傳」という作品があると紹介し、二つ目と三つ目の評語は馮夢龍の編とされる『智囊』、『太平広記鈔』に見られ、四つ目は出典が不明であるが、『情史』のためには書かれた可能性がある。文後評に最も多いのは無記名のもの

で、合わせて検討していく必要がある。

以上の研究を踏まえ、今後『情史』の研究、とくに評点の研究を進めるにあたっては、馮夢龍の他の作品に用いられる署名、引用される作品、そこに付けられた評点も合わせて考察を進める必要があると考えられる。

### 【注】

- (1) 馮夢龍の出版物については、容肇祖「明馮夢龍生平及其著述」『嶺南學報』、一九三二年第二卷第二期、「明馮夢龍生平及其著述続考」『嶺南學報』、一九三二年第二卷第三期、傳承洲「馮夢龍著作編年与考証」(『煙台大學學報・哲学社会科学版』、一九八九年第一期)、高洪鈞「馮夢龍的俗文学著作及其編年」『天津師範大學學報・社会科学版』、一九九七年第一期)等にまとめられる。

- (2) 大木康「馮夢龍『山歌』の研究」(勁草書房、二〇〇三年)による。

- (3) 人々「世紀回眸 馮夢龍研究的歴史和現狀」(『殷都學刊』、二〇〇一年第二期)に「學人對馮夢龍的注意首先是因為他編纂的『三言』、而『三言』的版本絕大部分又藏在日本、所以本土展開對『三言』的研究甚晚……魯迅對日本漢學家鹽谷溫一九二四年在「關於明代小說『三言』」一文中說發現了『三言』一事極為興奮、稱是在小說史上實為大事」(『中國小說史略・題記』)。「三言」的發現引起了國內學者的極大關注。」とある。

- (4) BARBARA BISETTO 氏は「The Composition of Qing shi (The History of Love) in Late Ming Book Culture (晚明書籍文化における『情史』の構成)」(Peter Lang、二〇一二年)において、「The number of editions and the number of copies of Qing shi that have been transmitted attest to the popularity of the work during the Qing dynasty and the early Republican period. Changes in the textual format, moreover, help shed light on the distinct cultural significance of this work and its theme in different periods.」と指摘している。

- (5) 大木康『馮夢龍と明末俗文学』(汲古書院、二〇一八年)第八章「馮夢龍の批評形式」による。

- (6) 上に挙げた容氏が用いる『蘇州府志』について、尤麗雯「爭鳴出版業——晚明文壇馮夢龍的個案研究」(國立中央大學博士論文、二〇一七年)には、「馮夢龍於順治三年(一六四六)即已去世、而同治年間距離馮夢龍生存的時代已相當久遠、故而後來的學者、即使認為馮夢龍為江南詹詹外、也不再以此條記載為主要依據。」と、公式的な史料とは言うものの、馮夢龍が亡くなった時代と二百年以上離れていることから、確実な証拠として用いられないところがあると述べている。

- (7) 喬衍琯「千頃堂書目敘錄」(清)黃虞稷撰、(清)杭世駿補、『增訂本千頃堂書目』(廣文書局、一九八一年據適園叢書後印增訂本影印)

- (8) 本論文は韓国語で書かれたものであるため、原文については省略し、筆者による日本語訳のみを載せる。

(9) 金源熙『情史』故事源流考述(鳳凰出版社、二〇一一年)には、「金三妻」……『警世通言』卷二十三「宋小官團圓破氈笠」本事」とある。

(10) 寧稼雨編『中国古代小説総目』(山西教育出版社、二〇〇四年)では、「即空觀主人(即淩濛初)」「拍案驚奇序」亦云、『獨龍子猶氏所輯『喻世』等諸言、頗存雅道、時著良規、一破今時陋習、而宋元舊種亦被搜括殆盡。』とする。「諸言」は「三言」のことであり、「子猶氏」は馮夢龍の字であるため、ここでは「三言」は馮夢龍の作としている。

(11) 注(9)前掲書に『太平廣記鈔』成書之後不久他又從事於編輯『情史』、因此此書對『情史』之影響、不可忽視。『情史』中所看到的『太平廣記』作品中有一半以上即一百三十篇故事又都見於『太平廣記鈔』。」とある。

(12) 同注(8)

(高 珮峰、広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期)

# Compiler, Completion Year, and Comments of Qing Shi Lei Lue —The Current Research and Future Research Topics—

Yuefeng GAO

**Key Words:** Qing shi lei lue, the publication, Feng Menglong

This study examines the existing research on the compiler, completion year, and comments in “a collection of narratives in literary language”(wenyan xiaoshuo ji), titled “Qing shi lei lue,” from the Ming Dynasty. Preliminary research on the compiler focuses mainly on the authorship of the novel’s two prefaces (namely, Long Ziyou of Wu and Jiangnan Zhanzhan Waishi). And based on Feng Menglong’s works included in Qing shi and the use of pen names in Feng Menglong’s other works, to explore whether the compiler is Feng Menglong. Research on the year of establishment mainly narrows down the scope of publication time by examining the works collected in Qing shi. The question of comments summarises the current research direction of investigations of Qing shi. The present analysis of the existing research provides a general understanding of the current research on Qing shi and identifies future research topics.